

# 時を表す語における意味変化の方向性

## —サキザキを中心に—

山 際 彰

### 1. はじめに

時を表す語彙を歴史的に眺めてみると、過去（未来）を表す語は専ら過去（未来）を表し、その両方から一方や一方から他方への意味変化を起こす語を見出しがたい。その数少ない例の1つであるサキザキは古くは過去を表していたが、やがて未来のみを表すようになる。では、なぜサキザキは例外的にこのような変化を見せたのか。

上記のような問題意識から、本稿ではサキザキの変遷を通してサキザキの意味変化の様相・要因について迫るとともに、「過去・未来の併用から一方のみの使用に偏る」、「過去（未来）の一方のみを表していた語が他方の意味へと傾く」という変化にどのような事例があり、それが何を意味するのかについて考察する。

### 2. サキザキの語史

#### 2.1 調査対象の選定

まずは、時を表す語彙に「両方から一方（過去・未来→過去／過去・未来→未来）」、「一方から他方（過去→未来／未来→過去）」という意味変化がどの程度存在するかを確認する。『日本古典対照分類語彙表』（2014）の1.1641 現在、1.1642 過去、1.1643 未来に区分されている90語のうち、『日本国語大辞典 第二版』（2000-02）（以下、『日国』）で過去・未来の両方の意味が記載されている語には、「<sup>あなた</sup>彼方」、「<sup>きんじつ</sup>近日」、「<sup>こなた</sup>此方」、「<sup>ききざき</sup>先々」、「<sup>ただいま</sup>只今」、「<sup>いま</sup>今」、「<sup>このころ</sup>此頃」、「<sup>こんど</sup>今度」の8語が挙げられる。これらのうち、上記の二種類の変化に該当しない語を除くと、「近日」と「先々」が残る。すなわち、過去・現在・未来という三分法で捉えられる語彙は、原則として過去を表す語は専ら過去、未来を表す語は専ら未来を表しているといえる。このうち、「近日」の意味変化は既に扱ったため（山際 2014a）、本稿ではサキザキを取り上げる。

## 2.2 サキザキの史的変遷

まずは、サキザキに関する先行研究を概観しておく。遠藤（1955）は（1）のサキザキを過去と解釈する三宅（1955）に対して、助動詞「らむ」の働きからこれを未来と解するものである。その上で、三宅（1955）が“中古のサキザキが専ら過去で用いられること”を根拠に当該の例を過去と断定することに疑問を呈している。この箇所は諸注釈でも解釈が割れており<sup>1)</sup>、遠藤（1955：55）が「この小論の欠陥は、「さきざき」が将来の意に移つていくプロセスを史的に辿れなかつた点にあるが、このことは今後の調査にゆだねる」と述べる状況に変化はないといえる。

- (1) そのおはする所にすゑたまへ。よもさき／＼みたまふらん、人のやうにはあらじ」とのたまへば、「あやし。こよひのみこそきこえさすとはおもひ侍れ。さき／＼はいかでかは」とはかなきこときこゆるに夜もやうやうふけぬ。  
(和泉式部日記 1010 [三宅 1955 を一部改めて引用])

遠藤（1981）は、『吾妻鏡』に見られるような過去を表す「せんせん（ぜんぜん）」の背景には、中古和文作品において「いずれの場合も過去を意味し、「以前に（から）、前々、従前」などと言い換えられる」サキザキの存在があることを示唆している。また、『平家物語』（覚一本）のサキザキが過去と未来の両方の意味で用いられていることにも言及するが、中古では過去を表していたサキザキが現代のように未来を表すに至るまでの過程には触れていない。また、勝俣（2011a）はサキザキに言及しているが、主眼はサキとアトの語義の転換にあるため、サキザキが現代の意味で用いられるようになった時期が数的な根拠をもって示されていない。

そこで、本節では上代～近代に渡るサキザキの用例調査を元にその時間的意味がいつ頃から今日のような未来主体へと転換したのかについて見ていきたい。管見の限りではサキザキは上代に見られず、中古～中世前期は先行研究（森田 1977、遠藤 1981 など）で言及されるように過去の例しか見出せない。これが中世後期になると、「行く方々の場所。行こうとする場所場所。」（『日国』による）といった空間の意味（以下、＜空＞）が使用され始めるようになり、この意味では『中華若木詩抄』や『大蔵虎明本狂言』、『太平記』といった幅広い作品に用例が見られる。『日葡辞書 補遺篇』（1604）も、サキザキの意味を「これから先」とし、「Yuqu saqizaqi.（行く先々）」の例文を挙げて「人が道を進んで行く目的地、あるいは、終点。」（邦訳日葡辞書 1980 [土井忠生ほか編] による）とする。一方で、中世前期に引き続く

て見られる時間的意味（以下、＜時＞）の例は、依然として大半が過去を表す。以上から、中世後期には＜空＞が主に口頭語として用いられ、＜時＞が用いられる場合は中世前期までと同様に＜時－過去＞に偏る傾向にあることがわかる。

表1 サキザキの意味の変遷

	＜空＞	＜時－過去＞	＜時－未来＞
中 古	－	50	－
中世前期	－	19	－
中世後期	6	9	2
近 世	42	8	15
近 代	38	1	23

- (2) <sup>(太郎冠者)</sup> さき／＼へ御ざつても、おともがなくてはみぐるしう御ざあらふ程に私もおとものにまいらふ （大蔵虎明本狂言 うつぼざる 1642）＜空＞
- (3) おなじ十日、院よりやがて六波羅の北、さき／＼も宮のわたり給し所へおはして、それよりぞ東に赴かせ給ふ。
- （増鏡 1368-75 年頃か）＜時－過去＞
- (4) <sup>(妻)</sup> なふはらたちや、さき／＼のわるひ事をいはします、此酒は誰がさければ、さやうに云ぞ、 （大蔵虎明本狂言 河原太郎 1642）＜時－未来＞

近世では、調査対象に口頭語を反映した資料（噺本、洒落本など）が多く含まれているためか、全 65 例のうち 42 例が＜空＞の例であった。＜時＞は、朝鮮資料にはいずれも＜時－未来＞の例が見られる反面、それ以外の読本（『椿説弓張月』、『春雨物語』）や注釈書（『源氏物語玉の小櫛』）、自叙伝（『折たく柴の記』）といった文章語的な資料には＜時－過去＞で用いられるという差が見られた。用例の出現状況から判断すると、【過去 8：未来 15】であることから、近世にサキザキの＜時＞が過去から未来へと転換したように見える。しかし、そうであるならば噺本や洒落本には＜時－未来＞の例が 1 例も見られないことが不自然である。

また、同時期には未来を表すサキザキの類義語である「末々」の例が少なからず見られる。その大半は浮世草子に見られるものであるが人情本や噺本などにも用例が見えること、近代には「末々」がほとんど見られなくなる点を踏まえると、後にサキザキが担う＜時－未来＞の意味をこの時点ではまだ「末々」が担っていた面があると考えることができる。よって、近世ではサキザキの＜時＞が過去・未来で拮抗しており、未だ現代とは異なる様相を呈しているものだと考えたい。

- (5) 「人の内証<sup>ないしやう</sup>はしれぬ物、此大津のうちにもさま／＼あり」と、醬油<sup>うり</sup>売まはるさき<sup>さき</sup>／＼にて見聞<sup>みきき</sup>、喜平次<sup>やど</sup>が宿にかへりて語りける。

(日本永代蔵 巻二 1688) <空>

- (6) 「しるしの中二ひらかしたまへ。さき／＼御父のために、おきのりわざして、今にかへさぬぞある」とて分ちとる。

(春雨物語 宮木が塚 1808-09) <時-過去>

- (7) いざ国本<sup>ともない</sup>へと倡、徳三郎には、金子百両給はり、末々<sup>すへ</sup>の事迄申合て、別れける。

(本朝二十不孝 巻五 1686) <時-未来>

近代も全体として<空>の例の比率が高いが、それらの用いられている資料が口頭語資料には限られない点、<時>が1例を除いて全て(8)のような未来の例である点が近世と異なる。また、<時>は過去のみを挙げる辞書(漢英対照いろは辞典 1888、言海 1889-91)が見受けられる一方で、過去と未来の語釈を併記する辞書(日本大辞書 1893-94、ことばの泉 1898、大日本国語辞典 1915-19)が見られるようになることから<sup>2)</sup>、未来の意味が定着したのは近代であるといっていよう。

- (8) 迎心とは彼の事は如何なるべき此の事は如何にすべきと先々の事を徒らに苦にする事也

(太陽第 14 号 牛門隨筆 1901) <時-未来>

サキザキが今日のように、<時-未来>が主体となるのは近代に入ってからであった。その要因として、サキザキの構成要素であるサキとその対となるアトの使用状況の変化が想定される。そこで、次節ではサキ・アトの使用実態を整理する。

### 3. サキ・アトの使用状況

#### 3.1 問題点の整理

まずは、現代のサキとアトの語義を確認する。現代のサキは「目的地を目指してさきへ進む」(明鏡国語辞典 第二版 2010) のような<空>、「さきのことはわからない」「事情はさきにお知らせしたとおりです」(同上 2010) のような、<時-未来>と<時-過去>を有する。アトも、「あとからついてくる」「あとで電話するわ」「話をあとにもどす」(同上 2010) のように、いずれの意味も持つ。ただし、『新明解国語辞典 第七版』(2012) でサキ・アトに<時-過去>の記述がないことから

支持されるように、現代ではともに<時－未来>が一般的である（畳語形のサキザキ・アトアトも現代では<時－未来>のみを表す）<sup>3)</sup>。すなわち、現代では「サキ（サキザキ）[未来]—アト（アトアト）[未来]」という関係をなしている。

では、これらはどのような史の変遷をたどってきたのか。サキについては、望月（1987）と日野（1991）がそれに触れている。しかし、前者はアトとノチ、後者はマへの史的推移に主眼が置かれており、サキの<時>の推移が十分に述べられていない。その点、柏原（1972）は「～ぬ先」の考察を主眼としつつ単独のサキにも言及し、「この未来、（今よりアト）の意味を示すものは、サキの頻度数からみて、わずかなものである。管見の単独例として、右〔筆者注：17C 初頭〕以上古い例が見出せなかった」、「サキが過去の意に用いられなくなる時期は、近世よりもずっとくだってからであろうか」と、<時－未来>のサキが近世頃から見られることを指摘しており、示唆的である。そこで、『日葡辞書』（1603）を確認すると、「Saqi. サキ（先・前）以前、または、前、先頭、前方など。」（日葡辞書 1603, 邦訳日葡辞書 1980〔土井忠生ほか編〕による）とあり、<時－未来>の記述は見られない。一方、『日本大文典』（1604-08）には「Maye（前）はただ過ぎ去った事だけを意味し、Saqi（先）は過ぎ去った事と来るべき事とを意味する。例へば、Saquino coto（先の事）は以前の事が来るべき事をいひ、Mayeno coto（前の事）は過ぎた事だけをいふ。」（日本大文典・第二巻 1604-08, 日本大文典 1955〔土井忠生訳〕による）とあり、<時－過去>と<時－未来>のどちらにも用いられたことが窺える。

これに関連して、勝俣（2011a, 2011b）が17C 後半にはサキ・アトの意味の逆転現象が起きたと述べているのは注目される。しかし、「サキ」「アト」という言葉は、世界の他の多くの諸言語と同じように、「サキ」は過去を、「アト」は未来を意味する言葉として、古代から現代にいたるまで使用されてきた。ところが、日本語のこの言葉は、戦国時代という大きな社会転換のなかから、「サキ」＝未来、「アト」＝過去というまったく正反対の意味を派生させ、以後、この言葉は、新・旧両方の正反対の意味をもつ言葉として使用され、近代以降、新語意は旧語意を圧倒するかたちで定着した。」（勝俣 2011a:21）と、近代以降のサキ・アトが「サキ [未来]—アト [過去]」という截然とした対立をなすかのように述べている点が疑問である。この説明では、“新語意（＝過去）のアトが旧語意（＝未来）を圧倒するかたちで定着した”ことになり、現代で「サキ [未来]—アト [未来]」という関係をなすことの説明がつかない。以上を踏まえると、近世頃にサキの使用実態に変化の兆候があったことは窺われるが、そこから現代にかけての実態は十分に把握されている

とはいいがたい。

他方、アトはその使用実態が先行研究で概ね明らかにされている。望月(1987)は、①中古に＜時＞獲得の兆しが見え始めること、②中世に＜時＞の使用頻度が増加し、近世には＜空＞よりも＜時＞の頻度が遥かに高くなり、近代後期にそれが安定することを指摘している。また、日野(1991)は「江戸語以降、「時間的な後」の意で安定したアトは、ノチがやや改まった文脈で使用されるのに対して、大体において砕けた文脈で用いられ」、それが現代までほぼ変わらないとする。

これに対して、湯沢(1960:83)には「われ／＼が過去を表わすのに「前」「以前」などを用いる場合に、江戸言葉では「あと」といふのが普通であった」とあり、＜時－過去＞のアトの存在が示唆される。柴田・進藤(1961)も、「「あと」を過去のことに使うのは江戸時代では一般的であった。〈略〉[筆者注:『好色一代男』や『浮世風呂』の他に] 狂言にもあり、滑稽本や人情本などにも随所に見られるものである。地域的には江戸でも上方でも用いられた。」と、ジャンルや地域によらずに＜時－過去＞のアトが使われたことを指摘している。加えて、①明治10年頃までは文学作品や新聞に＜時－過去＞のアトが使われているが、このころからマヘも使われること、②明治17・18年頃からあまり遠くない時代に(＜時－過去＞の)アトが東京では一般に使われなくなったであろうことを述べている。

つまり、先行研究を踏まえると、近世は＜時－未来＞が安定した時期(望月1987、日野1991)であるとともに、＜時－過去＞のアトも一般的に見られた(湯沢1960、柴田・進藤1961)ということになる。ただし、日野(1991)は＜時－未来＞のアトにしか言及していない<sup>4)</sup>。また、望月(1987)は意味区分に＜時－未来＞を立て、それがわずかな使用に留まるという結果を示しているが、近世の調査対象に乏しい節がある(『雑兵物語』、『奥の細道』、『浮世床』、黄表紙10作品)。逆に、湯沢(1960)や柴田・進藤(1961)では「普通」「一般に」という評価を下しているが、実数調査の結果が示されているわけではなく、実態は詳らかではない。

上記のような先学の指摘から、近世は＜時＞のサキ・アトの過渡期であったと仮定される。すなわち、それまで専ら過去を表していたサキが未来を、専ら未来を表していたアトが、過去をも表すようになるという状況が生じたものと推察される。そこで、以下では近世の文学作品におけるサキ・アトの具体的な調査結果から、それぞれの＜時＞がどのように用いられていたのかを確認する。

### 3.2 近世～近代におけるサキ・アト

本稿では、望月(1987)の調査に含まれていないジャンルの資料として洒落本(『聖遊郭』、『河東方言箱まくら』、『玉菊全伝花街鑑』)、人情本(『春色梅児誉美』、『おくみ惣次郎春色江戸紫』、『春色恋廻染分解』)、読本(『雨月物語』、『椿説弓張月』)を調査対象とした<sup>5)</sup>。表2から、サキはジャンルによらず<時-過去>で多用され、<時-未来>の使用は1割

表2 近世におけるサキ・アト

程度に留まることがわかる。この結果と、日野(1991)の挙げる未来のサキの用例が「将来、死ぬ時点のことを考え、その時点よりもさ

	サキ		アト	
	過去	未来	過去	未来
洒落本	—	—	3	15
人情本	8	1	8	47
読本	118	10	1	6

らに未来のことをさす」とする「死だ先」に限られる点を踏まえると、近世で<時-未来>のサキは活発に用いられていなかったといえる。『日本大文典』に<時-未来>のサキの存在が示唆されているが、柏原(1972)が指摘するように、それが<時-過去>を凌駕するのはもう少し時代が下るといえるだろう。

一方、<時>のアトはジャンルを問わず<時-未来>が多い。わずかに見られる<時-過去>には(11)のようなものもあるが、大半は「ア、モウ五六日前<sup>あと</sup>にたのんであるよ」(春色梅児誉美 三編巻之九 1833)のような「数詞+年月日」にアトが後接する例であった。そのため、柴田・進藤(1961)が「月日に関しているのが普通の用い方である」と指摘するように、用法に偏りがあったと考えられる。

- (9) 「さき<sup>しづら</sup>に下等が御僧を見て鬼来りしとおそれしもさるいはれの侍るなり。

〈略〉。」とかたる。(雨月物語 巻五 1776) <時-過去>

- (10) 清さん<sup>せい</sup>も火性<sup>ひしやう</sup>で火はわるいといふけれども、是<sup>これ</sup>から先<sup>さき</sup>は知らないが是迄<sup>なん</sup>つひに一度言やつたことはなし。さうして見ると、何が何だかあてにやアなりはしないハ (春色恋廻染分解 初編 1860) <時-未来>

- (11) 〈略〉後<sup>あと</sup>よりはなほつよく引<sup>しやう</sup>にければ、四男五郎<sup>たなご</sup>は掌<sup>すりやぶ</sup>を搦破り、思はず握りし弦<sup>つる</sup>を放せば、衆人<sup>もろびとのけ</sup>仰さまに崩<sup>なだ</sup>れかゝり、象棋<sup>しやうぎ</sup>たふしに倒れしかは、為朝主<sup>とつ</sup>従忍ぶに堪ず、「咄<sup>とつ</sup>」と笑ふて已<sup>やみ</sup>にけり。

(椿説弓張月 後編巻之二 1807-11) <時-過去>

- (12) 惣<sup>しかしたくし</sup>「〈略〉。併自己<sup>こりしやう</sup>やア人と違ッて。大変に凝性<sup>こりしやう</sup>だから。ありやア酒のうへの出来心や。何かは後<sup>あと</sup>じやア言<sup>いは</sup>せませんぜ。」



(おくみ惣次郎春色江戸紫 三編上 1864 頃) &lt;時-未来&gt;

以上からわかるように、近世のアトには確かに<時-過去>の例が見られるが、その割合は高くない。また、サキも<時-未来>の例はあるが、主に<時-過去>で用いられ、「サキ [過去] —アト [未来]」という対をなしている。この状況を 3.1 で確認した現代の状況と比較すると、アト（および後述のアトアト）は近世の時点で現代と一致するのに対し、サキ（およびサキザキ）は現代の状況と異なっていることがわかる。そこで、近代におけるサキの使用状況を確認するために、作品年代を考慮して選定した 4 著者（二葉亭四迷、幸田露伴、芥川龍之介、太宰治）の文学作品の調査を行った<sup>6)</sup>。その結果、二葉亭四迷（1880-1900 年代）は【過去 3: 未来 8】、幸田露伴（1890-1910 年代）は【過去 9: 未来 9】、芥川龍之介（1910-1920 年代）は【過去 7: 未来 20】、太宰治（1930-1940 年代）は【過去 15: 未来 24】と、近世とは異なって未来が過去を下回ることはなく、現代と近い状況であることが明らかになった。2.2 で述べたサキザキの調査結果と合わせて考えると、サキザキの意味変化はその構成要素であるサキの意味変化と強い関連性が見られるといえる。

(13) その力で逐いやらるるものは則ち先にいうた原則で必らず螺旋的に動くのサ。 (ねじくり博士 1890) <時-過去>

(14) 「さあ、乞食ばかりいたように思いますかね。……あの女はこの先どうするでしょう？」 (玄鶴山房 1927) <時-未来>

#### 4. 時を表す語における意味変化の方向性

以上、サキザキが<時-過去>から<時-未来>へと移っていく過程を見てきた。その結果、サキザキの意味変化はその構成要素であるサキの使用状況の変化が一因であることがわかった。ここで疑問となるのは、(i) なぜサキザキだけがサキの変化に対応して<時-未来>へと変化したのか、(ii) なぜサキザキは<時-過去>と<時-未来>を併用する語とはならなかったのかということである。

(i) は、<時-未来>のサキが増加した際に、「先頃」や「さっき」、「先つ頃」といったサキを含むあるいはサキを語源とする語は<時-未来>に変化しなかったのにも関わらず<sup>7)</sup>、なぜサキザキのみが変化したのかという疑問である。筆者はこれを、サキザキ側に積極的な理由があったと考えたい。一つ目の要因として、サキ



ザキが<時-未来>へと移行する前にあたる中世後期に前方向の含意をもつ<空>を獲得したことが挙げられる。これによって、空間的前方から時間的前方へのメタファーの働く土壤が整ったといえる。サキザキの<空>は文献の出現順では<時-過去>よりも遅れるが、二つの意味の関連性は見出しがたい。むしろ、これをサキザキの<時-過去>が<空>へ変化したのではなく、<空>のサキが疊語化することで生まれた意味（玉村 1986 の「個別指示」、譙 2005 の「逐一指示」に相当）と解する方が自然だと考えられる<sup>8)</sup>。すなわち、中古から<時-過去>を表す語として用いられていたサキザキと別の経路で、<空>のサキが疊語化して生じた<空>を有するサキザキが意味の抽象化によって<時-未来>を獲得したことで、結果としてサキザキという語が<時-過去>と<時-未来>の両方を有するようになったのだといえる。サキザキもその構成要素であるサキも<時-未来>の使用は中世後期頃からと見られるが、元々あった<時-過去>と正反対の意味であるため、その定着は近代頃まで下る。この登場から定着に至る要因となったのは、柏原（1972）が指摘する、“近代における過去を表すマへの台頭”であろう。マヘが近世末期～近代にかけて<時-過去>での使用が拡大したことで、「過去と未来とを意味することのできたサキは、未来を意味する狭い語義の用法にうつっていった」のだといえる。「マヘ（マヘマヘ）[過去]—サキ（サキザキ）[過去・未来]」よりも「マヘ（マヘマヘ）[過去]—サキ（サキザキ）[未来]」という体系の方が合理的であるために、サキおよびサキザキは<時-未来>主体へ移行したのだろう<sup>9)</sup>。加えて、未来のサキザキに相当する語がそれほど豊富でなかったことも一因だといえる。例えば、中古に空間的前方や未来を表した「行く先」や「行く末」は中世前期以降には使用頻度が減少しており、その欠を補う方向に語彙体系が再編されたのではないだろうか。

（ii）は、そのサキザキが理論上は過去と未来の両方を表せるにもかかわらず、なぜ未来のみを表すようになったのかという疑問である。これは、時の捉え方には“時間が未来から来て現在を通り、過去へ去っていくという見方（＝時間移動型）”と“空間が移動し、時間が固定しているという見方（＝空間移動型）”の二通りが可能であることと関係している（Fillmore, Charles.1997 や G. レイコフ・M. ジョンソン 1986、小泉 2001 など）。サキの場合、前者の発想では過去、後者の発想では未来だと捉えられる。つまり、時の捉え方としては同じサキという語が過去と未来の両方で用いられてもおかしくはない。事実、現代のサキは（<時-過去>はやや文章語的という性質はあるものの）どちらの意味でも用いられる。しかし、サキザ

キは両方の意味が併用されるという向きには傾かなかった。同じく、アトアトも現代では専ら未来を表すが、『日国』が『御触書寛保集成』(1642)と『徳川禁令考』(1642)の例を挙げて「いままで。従来。前々。」と記すように、近世には<時-過去>でも使用されていた。ただし、管見の限りでは同様の例はほとんど見られず、『江戸町触集成』(1994-2002)所収の文書である『正宝事録』に複数の例が散見するのみである<sup>10)</sup>。それらも1700年代以降にはほとんど見られなくなり、代わって「前々」(サキザキマヘマヘかは不明)の使用が目立つようになる。こうした時間的意味の単一方向性は空間的意味から時間的意味への意味変化を見せる語にもいえる。この変化はどの時代にも起こり得るが、これによって生まれた語は「最近」のように一時的に過去と未来の両方に用いられることはあっても(山際2014b)、ほどなく過去か未来のどちら一方の使用に落ち着く。つまり、時の捉え方としては過去・未来の両方を表し得るが、元々時を表す語であるか否かを問わず、実際にはほとんどの語がどちらか一方のみを表すのである。

以上から、2.1で確認したように、日本語の時を表す語彙には過去・未来の一方のみを表す傾向が強いといえる<sup>11)</sup>。ただし、ここではその傾向の強さが時代によって異なる可能性を指摘しておきたい。古代は文脈によって過去にも未来にも解釈される語(コノゴロやイマなど)が近未来の表現をまかなっていた(山際2017)。その他、吉野(2006)は古代において過去と未来の両方を指し得た語に「近し」や「遠し」、「をち」などを挙げている<sup>12)</sup>。これらの語は空間・時間の遠近がその語義の中心であるために、その方向性は文脈に応じてある程度緩やかに決定されていたのだろう。本稿で取り上げたサキザキやアトアト、そして類例である「近日」が過去・未来の両方の意味から未来へと傾くようになるのはいずれも近世～近代であった。このことから、こうした傾向がより顕著に見られるのは、(広義の)近代以降であると推測される。その背景には、近代における論理的思考への傾斜の影響があったのではないだろうか(渋谷2008:127)。時を表す語でいえば、過去・未来両用の場合はその文が表す時は述部を参照するまで決定されず、その指示内容は文脈に依存している。しかし、語毎にそれが固定されていれば、述部を参照せずともその文が過去のことを表しているのか未来のことを表しているのかが一意的に把握される。こうした明晰性が重視されるようになった結果、過去・未来の併用が避けられ、一方のみが採用されたのだと考えられる<sup>13)</sup>。

## 5. おわりに

本稿では時を表す語彙に見られる意味変化の方向性に着目し、その具体例としてサキザキやその類義語の使用の変遷を述べた。その上で、次の点を明らかにした。

- (Ⅰ) サキザキの時間的意味は中世後期までは過去が中心であったが、近世には拮抗し、近代に未来へ偏る。これは、中世後期からサキザキが空間的意味を獲得したことで、未来の意味を獲得する土壌が出来ていたこと、近世までのサキの時間的意味が専ら過去で用いられたのが、近代以降は未来を表すことが多くなることに起因する。
- (Ⅱ) サキザキが「過去→未来」へと向かう際に「過去→過去・未来」とならなかったのは、この変化が起こったのが過去・未来の方向性が文脈によって決定されることも許容されていた（広義の）古代ではなく、それが許容されにくい（広義の）近代に発生したためである。

空間的意味のサキザキは中世前期までは見られず、中世後期～近世の口頭語で盛んに用いられ、その後文章語にも定着する。時間的意味のサキザキは、中世後期以前は大半が過去の例であったが、近世～近代にかけて未来へ傾くようになる。この要因として、サキザキの空間的前方を表す意味が未来を表す意味へと変化を生じ、かつサキザキの構成要素であるサキの使用状況が、近世～近代にかけて過去主体から未来主体へと移行したことが挙げられる。未来を表すサキの増加は、同時期にマヘが過去を表す語として進出し始めたことに起因するものと考えられる。サキザキが未来に偏る中で過去と両用されなかったのは、時を表す語彙に過去・未来のどちらか一方のみを表すという傾向が強かったためだと考えられる。この傾向は日本語に元々見られるものであるが、（広義の）古代では一部の語が例外として存在するのに対して（広義の）近代では例外がほとんどなく、サキザキの意味変化の見られる時期が後者にあたるため、併用とはならなかったのだと分析した。

もっとも、サキとそれに関連する語彙の使用実態との関係については未だ明らかでない点が多い。例えば、上代からサキを構成要素に持つ他の語がいずれも＜時－過去＞を表す中で、なぜ「行く先」は例外的に＜時－未来＞で用いられていたのかといった点に疑問が残る。これらについては今後の課題としたい。

## 付記

本稿は、日本語学会 2018 年度春季大会で発表した内容に加筆・修正を行ったものである。席上でご指摘・ご教示くださった方々に感謝を申し上げる。

## 注

- 1) 森田 (1977) や『和泉式部日記 紫式部日記 更級日記 讃岐典侍日記 (新編日本古典文学全集 26)』(1994)、『和泉式部日記全注釈』(2002) は過去、『土左日記 かげろふ日記 和泉式部日記 更級日記 (日本古典文学大系 20)』(1957) や『増補版全講和泉式部日記』(1973)、『和泉式部日記全釈』(1994) は未来と解する。こうした状況について、『古語大鑑』は「将来の意味がいつから生じたかに関して、和泉式部日記」の例が「その早い例であるとする説がある」としつつ、「以前から今までの意味に解する説もあり、未だ定説には至っていないようである」と述べる (同 第 2 巻 2016 の「さきざき【先先】」の項)。
- 2) 例えば、『言海』(1889-91) ではサキザキが「(一) 過ギン時時。<sup>センゼン</sup>先前。<sup>サキザキ</sup>「先先ノ御代御代ノ例」さきざきモ、カヤウニテ、心動カスヲリヲリモアリケレバ」此度ハ、さきざき見ケム、夢ヨリモ」(二) 行ク方ノ処処。」とあるのに対し、『日本大辞書』(1893-94) では「(一) 過去ノ時時。= センゼン。(二) 行クベキ諸方。(三) スエズエ。= 未来ノ時時。」とある。
- 3) 筆者の内省では、アトの<時-過去>はやや許容しがたい。また、サキの<時-過去>は、新聞や学術論文などの硬い文章に限られるように思われる。
- 4) 「七、マヘ／サキ」で<時-過去>のアトに触れるに留まる (日野 1991: 219)。
- 5) 洒落本は『洒落本コーパス』の語彙素読み「サキ」「アト」で検索した。『春色梅児誉美』、『雨月物語』、『椿説弓張月』は日本古典文学大系本文データベース、『おくみ惣次郎春色江戸紫』は国立国語研究所公開のテキストデータを用いて仮名書き例とルビが「さき」「あと」である用例を採集し、ゴミを除外した。また、慣用表現(「跡へも<sup>さき</sup>前へも」「ぬれぬさきこそ露をもちとへ」など)や熟語の一部(「あとさき」など)は採集対象外とした。
- 6) 調査には『青空文庫パッケージ』(20170101 版) を用い、検索条件は「先」「さき」とし、<時>以外の例は調査対象から除いた。
- 7) 「さっき」は、「さき」に促音が挿入された形だと考えられる (山口 2004: 62)。また、「さっき」は仮名書きされることで語源意識が失われ、そのためにサキの意味変化に呼応して<時-未来>を獲得しなかったと推測できる。

- 8) 空間的意味から時間的意味への意味変化は自然な変化である反面、その逆の変化は認知上において不自然であるとされ(靱山 1992、定延 2011)、かつ歴史上にもその例は限られる(山際 2018)。この点、名詞由来の疊語には場所や時間を表すものが多いことが示唆されており(玉村 1986、譙 2005)、<空>を持つサキが疊語化することは不自然ではない。
- 9) そのマへの変化には、過去の助動詞の体系が中世後期頃から変化したことに伴う、時を表す語彙体系の再編という事情が考えられる(山口 2004)。古くは「前」がサキともマへとも読めたという表記の問題も考慮すべきだが、改めて考えたい。
- 10) 「一 跡々如相触候、町々ニ<sub>ニ</sub>左儀長焼候儀、堅無用ニ可仕候」(正宝事録 1682/01/10)、「一 町中ニ<sub>ニ</sub>諸事祝儀事ニ付ねたりかましき事申掛ケ、方々ニ<sub>ニ</sub>理不尽成義仕候由、跡々より相聞候間、及見及聞次第、左様之者於有之は早々番所召連可参事」(同 1693/12/18) など。これらはいずれも「跡々」表記だが、『日国』が挙げる「何卒借錢もなして跡々にて人にも云出さるやうに」(世間胸算用 二 1692) や、『ひらかな盛衰記 第三』(1739 初演)、『涙の媒介』(1895・太陽 6 号) のように、「跡々」表記で未来を表す例も散見される。
- 11) 現代中国語の「最近」や「近日」は過去と未来の両方を表し得るほか(漢語大詞典 1979-93)、ネズパース語やヒンディー語、エウエ語など基準時から見て同じ時間幅の過去・未来を同じ語で表す言語も存在する(青木 1976、中村 1961、E. カッシーラー 1989 など)。そのため、一語で過去と未来の一方のみを表す傾向は通言語的に一般的であるとはいえない。
- 12) 例えば、「昨日よりをちをば知らず百年の春の始は今日にぞ有ける」(拾遺和歌集 巻第十八 [1159] 1005-07 頃) <時-過去>、「この頃は恋ひつつもあらむ玉匣あけて乎知より為方なかるべし」(万葉集 巻第十五 [3726] 8C 後半) <時-未来>など。また、存否の分かれる例にアナタがある。吉野(2006: 28) は「未来について言った例をいまだ探していない」とするが、『日国』は<時-未来>の例に「目のまへに見えぬあなたの事はおぼつがなくこそ思ひわたりつれ」(源氏物語 若菜上 1010) を挙げる。これについて藤本(2009: 10) は、『源氏物語』で<時-未来>のアナタはこの例のみで、他は全て<時-過去>とする。
- 13) ただし、これについては「過去・未来→未来」(=「近日」)、「過去→未来」(=「サキザキ」)という変化に対し、「過去・未来→過去」、「未来→過去」という事例は観察されない。これは歴史上、未来を表す語彙よりも過去を表す語彙の方が上代から既に豊富であったことが関わっていると見られる(山際 2019: 179)。

## 調査・引用資料

引用は原則として調査・引用資料及び参考文献による。ただし、旧漢字を通用字体とし、句読点や会話文を示すかぎ括弧を補い、下線や太字処理を行った箇所がある。

■ 日本古典文学大系所収の作品(『宇津保物語』、『栄華物語』、『狂言集』、『太平記』、『江戸笑話集』、『西鶴集』と漢文・韻文は除き、国文学研究資料館の大系本文データベース <http://base1.nijl.ac.jp/~nkbthdb/> を利用)に加え、次の資料を用いた。

■ コーパスの用例検索には全文検索システム『ひまわり』(『明六雑誌』『国民之友』『青空文庫』: Ver.1\_5\_3、『人情本』『洒落本』『太陽』『近代女性雑誌』: Ver.1\_5\_6)を用いた。参考 URL の後の日付は最終確認年月日である。

**中古** うつは物語: 新編日本古典文学全集 **中世前期** 十訓抄、とはすがたり: 新編日本古典文学全集/閑居友: 『閑居友本文及び総索引』笠間書院 **中世後期** 史記抄、四河入海、毛詩抄: 『抄物資料集成』清文堂出版/湯山連句抄: 『湯山連句抄 本文と総索引』清文堂出版/エソポのハブラス: 『エソポのハブラス本文と総索引』清文堂出版/中華若木詩抄: 『中華若木詩抄 卷之上(中、下) 文節索引』笠間書院/天草版平家物語: 『天草版平家物語対照本文及び総索引』明治書院/太平記: 『土井本太平記 本文及び語彙索引』勉誠社/大藏虎明本狂言: 『大藏虎明本狂言集総索引』武蔵野書院、『大藏虎明本狂言集の研究』表現社 **近世** [西鶴著作]: 『新編西鶴全集 一—四巻』勉誠出版/[嘶本]: 嘶本大系本文データベース [http://base1.nijl.ac.jp/infolib/meta\\_pub/CsvSearch.cgi](http://base1.nijl.ac.jp/infolib/meta_pub/CsvSearch.cgi) [2017/10/16] / おくみ惣次郎春色江戸紫: 日本語史研究資料 [dglb01.ninjal.ac.jp/ninjaldl/](http://dglb01.ninjal.ac.jp/ninjaldl/) [2017/09/25] / 春色恋酒染分解: 『春色恋酒染分解翻刻と総索引』おうふう/比翼連理花廻志満台: 『人情本コーパス』[Ver.0.1] 国立国語研究所/聖遊郭、河東方言箱まくら、玉菊全伝花街鑑: 『洒落本コーパス』[Ver.0.5] 国立国語研究所コーパス開発センター/捷解新語(原刊本、第一次改修本、重刊改修本): 『三本対照捷解新語』京都大学国文学会、『改修捷解新語』太学社、『四本和文対照 捷解新語』専修大学出版局/隣語大方: 『隣語大方』京都大学国文学会/狂言記、狂言記外五十番、続狂言記、狂言記拾遺: 『狂言記の研究』『狂言記外五十番の研究』『続狂言記の研究』『狂言記拾遺の研究』勉誠社/雑兵物語: 『雑兵物語研究と総索引』武蔵野書院/正宝事録: 『江戸町触集成』塙書房 [5 節のみ] **近代** 明六雑誌: 『明六雑誌コーパス』[Ver.1.1] 国立国語研究所/国民之友: 『国民之友コーパス』[Ver.1.0] 国立国語研究所/女学雑誌、女学世界、婦人倶楽部: 『近代女性雑誌コーパス』国立国語研究所/太陽: 『太陽コーパス』博文館新社/安愚楽鍋: 『牛店雑誌安愚楽鍋用語索引』秀英出版/[文学作品]: 『CD-ROM

版新潮文庫の100冊』新潮社、『青空文庫パッケージ』[20170101版] 国立国語研究所 [4節のみ]、[新聞]:神戸大学附属図書館 デジタルアーカイブ【新聞記事文庫】  
<http://www.lib.kobe-u.ac.jp/sinbun/> [2017/12/12]

## 参考文献

- 青木晴夫 (1976) 「アメリカインディアンの時間表現〈ネズパース語にみる時と相〉」  
『月刊言語』5-12
- 遠藤好英 (1981) 「記録・文書の語彙」佐藤喜代治 [編] 『中世の語彙』明治書院
- 遠藤嘉基 (1955) 「新講和泉式部物語 (八) —高橋・三宅氏に答える—」『国語国文』  
24-4
- 小野正弘 (2001) 「通時態主導による「語彙」「語彙史」」『国語学研究』40
- 柏原司郎 (1972) 「「焼けない前」と「焼けぬ先」と」『北海道教育大学・語学文学』10
- 勝俣鎮夫 (2011a) 「バック トウ ザ フューチャー—過去と向き合うということ—」  
『中世社会の基層をさぐる』山川出版社
- 勝俣鎮夫 (2011b) 「柳生の徳政碑文—「以前」か「以後」か—」『中世社会の基層  
をさぐる』山川出版社
- 小泉保 (2001) 「直示 (Diexis)」小泉保 [編] 『入門語用論研究—理論と応用—』  
研究社
- 定延利之 (2011) 「認知言語学・語用論と語彙」斎藤倫明・石井正彦 [編] 『これから  
の語彙論』ひつじ書房
- 篠原和子 (2008) 「時間メタファーにおける「さき」の用法と直示的時間解釈」篠  
原和子・片岡邦好 [編] 『ことば・空間・身体』ひつじ書房
- 柴田武・進藤咲子 (1961) 「あととまえ」『言語生活』118
- 渋谷勝己 (2008) 「新たなことばが生まれる場」乾善彦・渋谷勝己 [編] 『日本語史  
のインタフェース』岩波書店
- 譙燕 (2005) 「豊語名詞の意味」『日本学研究』15 (北京大学研究中心)
- 玉村文郎 (1986) 「古代における和語名詞の豊語について」宮地裕 [編] 『論集日本  
語研究 (二) 歴史編』明治書院
- 寺崎知之 (2016) 『日本語の時間表現に関する認知意味論的研究』京都大学博士論  
文
- 中村元 (1961) 「静止的性格」『東洋人の思惟方法 1 インド人の思惟方法』春秋社
- 日野資純 (1991) 『基礎語研究序説』桜楓社



- 藤本真理子 (2009) 「ナタ形指示詞の空間・時間における方向性—平安時代を中心に—」『詞林』 45
- 三宅清 (1955) 「「さきざき」の意義」『国語国文』 24-4
- 三宅清 (1989) 「「ぬ<sup>さき</sup>前」考—源氏物語を中心として—」『岡山大学教育学部研究集録』 81
- 望月満子 (1987) 「アトとノチの語義について—その史的推移—」『国語学』 148
- 初山洋介 (1992) 「多義語の分析—空間から時間へ—」カッケンブッシュ寛子ほか[編]『日本語研究と日本語教育』名古屋大学出版会
- 森田兼吉 (1977) 「和泉式部日記「さき／＼み給らん人」考」『和泉式部日記論攷』笠間書院
- 山際彰 (2014a) 「「近日」の語誌」国語語彙史研究会[編]『国語語彙史の研究 三十三』和泉書院
- 山際彰 (2014b) 「「最近」と「近日」」『国文学』 98 (関西大学国文学会)
- 山際彰 (2016) 「「最近」と「近時」」国語語彙史研究会[編]『国語語彙史の研究 三十六』和泉書院
- 山際彰 (2017) 「「近々」の語誌」国語語彙史研究会[編]『国語語彙史の研究 三十七』和泉書院
- 山際彰 (2018) 「時間的意味から空間的意味への意味変化の可能性—「端境」の変遷を通して—」『国立国語研究所論集』 16
- 山際彰 (2019) 『時を表す語彙の体系的研究』関西大学博士論文
- 山口堯二 (2004) 「至近過去を表す副詞の形成」『仏教大学文学部論集』 88
- 湯沢幸吉郎 (1960) 『増訂江戸言葉の研究 再版』明治書院
- 吉野政治 (2006) 「古代時間語彙の分類」国語語彙史研究会[編]『国語語彙史の研究 二十五』和泉書院
- E. カッシーラー／生松敬三・木田元 [訳] (1989) 「直観的表現の位層における言語」『シンボル形式の哲学 (一) 言語』岩波書店
- Fillmore, Charles. (1997) Lectures on Deixis. Center for the Study of Language and Information
- G. レイコフ・M. ジョンソン／渡部昇一・楠瀬淳三・下谷和幸 [訳] (1986) 『レトリックと人生』大修館書店